第九部会

供養あるいは慰霊——日本的宗教性——

浅野 章

日本人の宗教観を適切に表すことは必ずしも容易ではない。事実においてみる限り、日本人は宗教的国民性を持った民族といえよう。俗にいう「盆と正月」、あるいは国民の祝日として制定されている、春分の日・秋分の日などは、宗教なくしてはあり得ない。しかし他方において、「あなたの宗教はなんですか」と問われて、多くは一瞬戸惑いを覚えるであろう。

複雑な日本の宗教事情を反映し宗教の研究には、宗教学はもとより諸学が歴史学を伴い根柢に宗教哲学を望みながら関連してくる。なかでも民俗学の観点から事例を踏まえての論考は注目される。日本人の宗教観を重層的構造・重円的構図によって理解しようとする(桜井徳太郎「民間信仰」、田中美知太郎編『宗教と倫理』人文書院)構想も生まれる。

宗教的行為の著しい例として供養を挙げることが出来る。

供養は梵語 *pūjānā* 「供給資養」の義で、三宝、父母、師長、亡霊等に飲食香華等供えて廻向すること(『新編佛教辭典』大東出版社、一九三三)。供養は仏教用語として、種別化される。因みに三種供養は、一に敬供養(堂塔の裝飾など)、二に行供養(読経礼賛など)、三に利供養(飲食衣服香華等の進供)。供養は今日、亡霊すなわち死者の霊が主な対象となっている。いま考察の都合上試論的に供養をその構造より簡略に分析してみる。

《…が》《…を》《…のために》《…をもって》《…のときに》
《…において》《供養する》。

《…が》は、供養する主体。個人もあれば集団もあるが一者とは限らない(御禱奉行とその執行者の例)。《…を》は、供養の客体、供養される対象。宗教の特性が現れる。宗教の本質をはじめ、民族あるいは民俗的性格が窺われる。《…のために》は、供養の目的。「冥福」はその一つ。客体についてなされている。しかし、主体の心情「おそれ」「すまない」「ありがたさ」などが根底にある。《…をもって》は、供養の仕方。供養の語義が示している。《…のときに》は、時間、時期、時代を指す。宗教の研究には歴史学が必須であり重要。《…において》は、場あるいは場所、地域、空間。時間とともに比較文化論の背景をなす。

分析中特に《…を》に注目する。「霊を」対象とする供養・慰霊である。語義の上からは亡霊であるが、亡霊すなわち死者の霊のみが供養の対象ではない。山川木石を対象とする自然崇拜、雨風雷火の根源力に対する精霊信仰があるが、それらの威力に対する異常体験による。亡霊について文学は資料に富む。しかし霊の実在について、カントは『ある視霊者の夢』(一七六七)で、これを否定した。宗教哲学は、宗教的体験の理論的回顧、その反省的自己理解である(波多野精一『宗教哲学』岩波書店、一九四九)。事例研究の重要性は宗教民俗学の誕生を促す(宮家準『宗教民俗学への招待』丸善ライブラリー、一九九二)。供養碑は供養研究の重要資料で、「怨霊追善」という日本古来の神祇と仏教の「怨親平等」の融合である「蒙古の

碑」がある。北条時宗の依頼で無学祖元が銘文を記した(『現代宗教』特集「慰霊と追悼」国際宗教研究所編集、二〇〇六)。板碑としての「蒙古の碑」は、仙台住民によって今もなお献句碑として追善供養がなされている。「侵略に來た敵の將兵の追善供養は、敵味方を超越し普遍的な何かが求められており、日本がまだ近代に毒される以前の信仰心の原型がこの「蒙古の碑」によって象徴されている」(同上二二二頁)。動物慰霊祭も日本独自の営みとされたが、近年中国がこの種の碑を建立し中国有史以来の出来事として注目される。科学者と供養のかかわりにも日本独自の在り方が認められる。その一つは日本人の遺体観にある。《…を》にかかわる問題である。

室町時代における戦死者慰霊

山田 雄司

研究の意義

戦死者に対する慰霊はいかに行われてきたのか、前近代に関する研究は非常に手薄。「戦後処理」の研究は少ない。日本文化の中核を占める死者慰霊。

中世戦死者慰霊の系譜

源頼朝による慰霊

文治元年(一一八五) 勝長寿院建立・父義朝・郎従鎌田正清の首埋葬。平家滅亡の衆たちの菩提を弔う万燈会。

文治五年(一一八九) 永福寺建立・奥州藤原氏・源義経の鎮魂

蒙古の碑(仙台市善応寺)

明徳の乱(明徳二年・一三九一)の慰霊

明徳三年(一三九二) 四月十日、足利義満が施主となり戦死者慰霊としての施餓鬼

○合戦で亡くなった人々の亡魂におびえる。南北朝内乱で亡くなった人々を尊氏が夢窓疎石のすすめで天龍寺を建立して慰霊したのにならい、義満は相国寺で大施餓鬼。山名氏清ら敵味方の戦死者の亡魂を弔う。

『諸回向清規式』憑茲善利救濟亡靈者伏願。多生垢憑佛日以消除累劫冤愆杖慈風而蕩滌。

○明徳三年四月十日、足利義満が施主となって逆臣・忠臣ともにその霊を慰めるために千人の五山僧による経の書写や施餓鬼。↓北野万部経会

↓義満のとき、戦死者供養としての施餓鬼定着↑臨濟禅の影響
南北朝のころ施餓鬼は盆供養と結びつく。↑東アジアにおける施餓鬼の隆盛

中国 宋代に施餓鬼が盂蘭盆で行われるように。

朝鮮 太祖・太宗による国家的行事としての水陸会

施餓鬼の拡大

応永六年(一三九九) 大内義弘が幕府に反旗を翻した応永の乱。鎌倉府も巻き込む。

鎌倉では新居閻魔堂(円応寺)で施餓鬼

足利義持は応永二十三年(一四一六)十月に起こった上杉禅秀の乱における戦死者追善のために、相国寺で大施餓鬼。

○無縁霊↓施餓鬼供養・政争による特定の非業の死者への個別的对処から、不特定多数の死者の供養への拡大